

南アフリカの言語社会と教育

辻 井 輝 行

1. はじめに

我々の住む日本から南^{#1}アフリカ共和国は、ほぼ地球の裏側に位置し、多くの意味で遠い国である。そのため、南アフリカと言えば「アパルトヘイト」という語だけが鮮烈に浮かんでくる。複数言語社会の国語教育に興味を持ち始めてから、いつかは訪れてみたいと思っていた。今回南アフリカ大学（UNISA）から招待及び協力の申し出を受けての訪問となった。

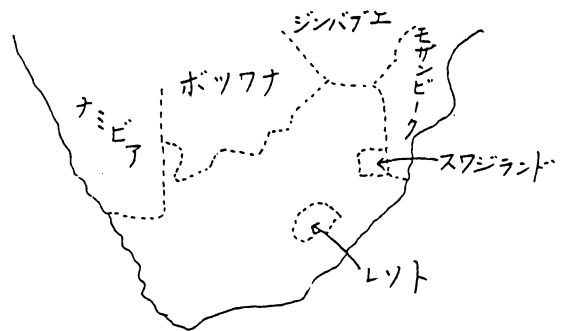
2. 国のあらまし

・ 地理

南アフリカはアフリカ大陸の最南端に位置し、東はインド洋、西は大西洋に面している。北は西から東へ、ナミビア、ボツワナ、ジンバブエ、モザンビーク、スワジランドの国々と国境を接し、内陸部に^{#2}レソト王国と新しい独立国ベンダ、ボプタツワナ、トランスカイ、シスカイが散在している。

・ 人口

1985年の予備調査では、2343万9000人。この人口には13の民族が含まれている。人種構成比率の首位は総人口の6割以上を占めるバンツール系黒人グループで、最も多いズル族(600万人以上)のほか9つの種族があり、合計1524万3000人、第2位(約2割)がヨーロッパ系白人(457万7000人／イギリス・イタリア・ポルトガルなどからの移民)、次いで第3位(1、2割)の混血(282万5000人)で、第13位の最少数民族がインド系、中国系のアジア人(79万4000人)と続いている。



・ 歴史

先住民にホッテントットとブッシュマンの2種族がいたが、遅れて北方からバンツ族が移動して住みつくようになった。

1488年、ポルトガルのバーソロミュー・ディアスが喜望峰を発見、次いで1497年、バスコ・ダ・ガマがセント・ヘレナ湾に上陸、同年ナタールを発見。白人社会の起源は、1652年にオランダ人、ヤン・ファン・リーベックが喜望峰に入植した時にさかのぼる。その後、フランス人ユグノー派教徒（1688年に入植）、それにさまざまなドイツ人集団（1848年から1948年にかけて入植）が加わり、渾然一体となって白人社会を形成していく。

入植者の増加に従い、植民地も海岸沿いの平地から内陸の高原へと拡大していくが、その一方で入植者と先住民との間の紛争も生じ始め、18世紀に入るとこの土地にイギリスが軍隊を送り込み、1795年にケープを占拠。さらに1815年、ケープは正式にイギリスの植民地となり、1820年にはイギリス本国より5000人の移民が到着。しかしオランダ系¹³ボーア人（アフリカーナー農民）はイギリスと奴隷の処遇問題で意見のくい違いを見せ、約6000人（ケープ植民地に住んでいた白人の約10%）が、1834年から1836年にかけて、イギリスの支配を逃れて北に移動し、1852年にトランスバール共和国、1854年にオレンジ自由国¹⁴を築く。

ところが1867年にキンバリー近くでダイヤモンドが発見され、1886年にはウィットウォーターズランドに世界最大の金鉱脈が発見されるに至り、大英帝国最盛期の拡張主義政策が引き金となってボーア戦争（1899年～1902年）が起こる。その結果、前述のボーア人の2つの共和国はその戦いに敗れ、イギリスの植民地となる。

まもなく自治権を与えられたボーア人は、政治的結束を固め、1910年にトランスバール、ナタール、ケープ、そしてオレンジ自由の4つの州からなる南アフリカ連邦を成立。1948年、ボーア系の国民党が政権の座につくと、「アパルトヘイト」などでますますイギリス系白人との対立が強まり、その結果イギリス連邦離脱宣言、1961年には共和国となった。



・ 社会

人口は約3322万人（1986年現在）。1910年にイギリス連邦内の自治国として発足、1961年にイギリス連邦から離脱し、共和国となる。1984年以降は大統領が国家元首となり、19人の大臣と20人の副大臣が閣僚を構成する多人種内閣である。

立法機関としては、白人議院（House of Assembly）、カラード議院（House of Representatives）およびアジア系議院（House of Delegates）の人種別三院制を採用、各院ともに立法権を持ち、その閣僚評議会はそれぞれの代表する人種にかかわる諸問題を審議す

る一方、国家全体にかかわる問題については三院合同議会により決議する仕組みになっている。また同国は三権分立制がはっきりしており、首都も三ヶ所（行政府はトランスバル州のプレトリア、立法府はケープ州のケープタウン、司法府はオレンジ自由州のブルームフォンティン）に置かれている。

3. 南アフリカの言語

公用語は英語とアフリカーンス。後者は、17世紀のオランダからの移民の言葉から発達したもので、オランダ語と現地の言葉の融合によってできあがった。また、黒人社会には大きく分けて4つの代表的な部族（ングニ、ソト、ツォンガ、ベンダ）の言語が話されている。

・ バンツー語 (Bantu languages)

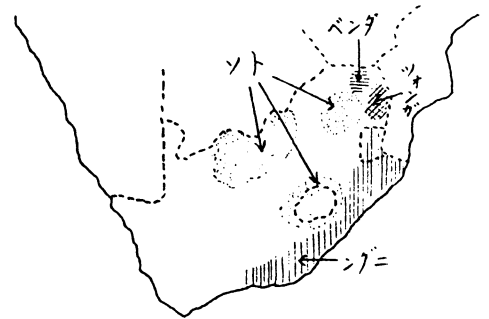
バンツー語といえば、アフリカ南西部の代表的なアフリカの言語であり、4つのグループに大別できる。これらの中でングニのグループが最も多く1400万人、次いでソトグループは700万人、ツォンガグループは100万人、ベンダグループは50万人である。

比較的同質のベンダ語のグループは別として、その他のグループは、いくつかの集団に分けられ、その多くは方言と見なされる。このクラスターと呼ばれる集団は、ングニでは12、ソトでは11、ツォンガでは4つが認められる。

4つの言語間では、相互に言葉を理解することはできない。しかし、それぞれの言語内において、クラスター間の音声上や文法上の相違は、相互の理解の大きな障害とはならない。それゆえ、これらのクラスター間では、比較的容易に他のクラスターに直すことができる。この複雑な言語の中で、ングニのグループではズル、コーザ、スワジ、ンデベレの4つ、ソトのグループでは北部ソト、西部ソト（ツワナ）、南部ソトの3つ、そしてベンダとツォンガの、合わせて9の言語が公的に認められている。

・ ングニ語 (Nguni language)

ングニ語は1400万人の人々によって話されている。クワズルとナタールにおいてはズル語（640万人）が、ケープではコーザ語（620万人）が優勢である。600万人以上という数位的優位と、多言語使用の工業中心部の口語として、ズル語が南アフリカで最初の混合語になった点、一方コーザ語は、1834年に南アフリカ



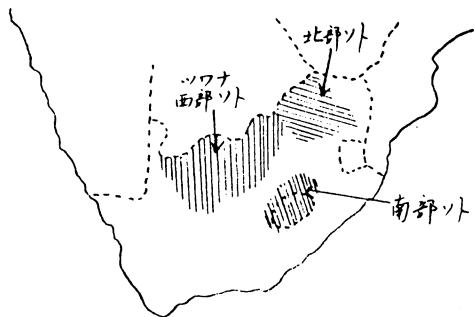
の言語としては最初に文法が公表された点は、特筆すべきことである。

スワジ語はスワジランド（スワジ王国）の主な言語であるが、南アフリカでは85万人が使用している。東トランスバールのカングワネとその周辺で話されている。ズル語は古くから読み書きの目的でも使用されていたが、スワジ語は、もっぱら会話のみに使用され、最近になって読み書きの手段としても発展してきた。

ングニ語の中のもう1つの言語であるンデベレ語（394000人）はクワンデベレと中央トランスバールで話されている。過去においてンデベレの人々は、読み書きの必要上、主にズル語を使用していた。しかし、最近になってンデベレ語は公式認定を受け、第4のングニ語となった。1986年には全てのンデベレの学校に紹介された。近い将来、学校での授業科目としてズル語に置きかわるであろう。

・ ソト語 (Sotho language)

ソトという語は、この言語集団のために用いられる。なぜなら、700万人にものぼるこの言語を話す人々は、自分自身のことをバソトと呼ぶからである。ソト語は大きく3つのグループ(北部、南部、西部)に分かれ、ングニ地域の北部の領域を占めている。南部ソト語(190万人)は主にクワクワで話され、オレンジ自由州の領域にとりあっている。またレソト王国に隣接する言語でもある。そして、隣接するングニ語の影響を受けて、ングニ語特有の舌打ち音がみられる。



北部ソト語と西部ソト（ツワナ）語は、2つの切り離された方言であり、かなりの相互関係がある。西部ソト（ツワナ）語（280万人）はプレトリアからボツワナに至る広い地域で話されている。北部ソト語（290万人）はプレトリアからジンバブエに至る地域で話され、3つのグループの中では最も多くの人々が用いている。

・ ツォンガ語 (Tsonga)

ツォンガ語、あるいはシャンガーン族は、モザンビークに隣接している。東北トランスバールと、北部ズルランドのマプトランドを中心に、約100万人の人々が使用している。

・ ベンダ語 (Venda)

ベンダ語は、ベンダ共和国と南アフリカを合わせても、わずか50万人という4つの言語グループの中で最も小さい言語である。ピーターズブルグから北へジンバブエに至る北部トランスバールで話されている。他のングニ、ソト、ツォンガの各言語とは異なり、方言の存在が認められず、そのため言語集団（グループ）というより、一言語と呼んだ方がいいだろう。

以上、黒人社会における代表的言語について述べたが、次に、公用語としてのアフリカ

ーンスと英語について、触れてみる。

- ・ アフリカーンス (Afrikaans)

アフリカーンスは南アフリカの公用語の1つであるが、1652年に始まっている。当時政府や文化生活面では、オランダ語が使用されていたが、約150年という比較的短い期間にアフリカーンスにとって代わった。そして18世紀の終わりまでに、ボーア人 (Boer-Afrikaners) によって話される言語は、発音、アクセント、文章構成、語彙など、あらゆる点においてオランダ語とは異なったものになっていた。

初期における変化の重要な原因は、地理、植物、動物の名称を扱った科学的論文や、内陸部の探検日記であったとされる。これらの中で、発音の変化、動詞の短縮、冠詞や複数語尾の脱落が見られ、オランダ語とは異なりアフリカーンスの典型的なものとなった。

アフリカーンスの語彙の主な部分はオランダ語から派生し、現在のオランダ語とアフリカーンスの両方に共通であるものもある。しかし一方では、現在のオランダ語には見られないたくさんの語がある。それらのある語は17世紀またはそれ以前のオランダ語では使用されていた。またそれらのほとんどの語は、オランダ語の方言に起源を持ち、現在のオランダ語の方言に見られるものもある。

また両者において、発音、母音や子音の機能も全く異なっている。オランダ語と比較すると、最後の子音や母音の間にある子音が省略されたり、位置を変えたりする。ある種の母音に変化がおこり、鼻にかけて発音することは、アフリカーンスの典型的な特徴になっている。

最も注目すべき相違点は、言葉の形式的構造においてである。オランダ語にくらべて、簡単な構造になり、動詞、形容詞、名詞、代名詞のシステムに大きく反映している。二重否定、前置詞のくり返し、副詞のくり返し、名詞の前後に来る副詞、ある動詞句の固定した順序などで、アフリカーンスはある種の典型的な文法型式を発展させている。

- ・ 英語 (South African English)

南アフリカの英語の歴史は1795年に始まるが、Cape Dutchなど他の言語の影響を受けることになる。イギリス人の内陸部への入植につれて、英語も内陸部へと広がっていった。その過程でアラビア語、ペルシャ語、タミル語などとの融合によって、新しい語彙を生み出すことになる。また、ペルシャ語のbazaarにdepartment storeの意味を加えることになったり、robotがtraffic lightであったり、南アフリカ人でないと理解できない語も多い。

語彙にとどまらず、発音に関してもいくつかの特異性がみられる、in, sit, is, his, kissなどの /i/ は、アフリカーンスの /ie/ のように発音する。chair, stair, four, score, cruelなどの語では、第二母音を発音しない。bar, harmなどの母音は、短かくawをさらにまるくしたように発音する。/r/ の発音は、スコットランドのように巻き舌音でなく、南部イングランドもしくはそれ以上に単純に発音される。

4. 教育

・ 白人

1984年10月以来、白人のすべての教育については、白人議院（House of Assembly）が責任を持ってきた。また4つの州の教育局は、主な機能と白人のための教育政策を担当している。

i) 学校制度

Primary-phases（小学校）とSecondary-phases（中学校）がそれぞれ6年ずつの12年間で、それぞれがジュニアとシニアの3年ずつに分かれている。Junior Primary（小学校前期）の段階（Grade iとii, Std 1）においては、教科を分けずに合科授業も行われる。小学校において試験を実施しない教科として、宗教教育、体育、音楽、教育ガイダンスがある。ふたつの公用語（英語とアフリカーンス）、数学、科学、歴史、地理、基本技術（図画工作）の授業は、細心の注意が払われている。

Junior Secondary（中学校前期）の段階（Std 5～7）では、ほとんどの教科が必修科目である。同時に、地域や集団の条件によって、内容を適宜合わせるように行っている。教科はSenior Primary（小学校後期）段階と同じであるが、学校の型や学習のコース等、生徒が選んだ専攻によって、2～3科目の選択科目を履修してもよい。Std 5（中学校1年）の終わりになると、Senior Secondary（中学校後期）でのコース専攻に向けての仮の選択をしなければならない。そしてSenior Secondary（中学校後期）の段階への入試科目は6つの型に分かれ、志願者は両公用語と、4～5科目で受験をする。その科目は、コースと学校の種類によって決まる。またこれによって大学入試の資格が与えられる。試験のない科目は聖書、体育、音楽、教育ガイダンスである。

Pre-Primary Education（前小学校教育）に関して、以前は私立学校局の管轄下にある私立学校が主流であったが、近年、州の教育局がPre-Primary Educationを管轄下に入れるようになり、保育所の教師の養成も行っている。1988年には、公立学校に34064名、私立学校に48020名の生徒が在籍している。

ii) 教員養成

小学校教員は、教育大学や教育大学と提携している大学で養成される。中学校教員は、一般の大学で養成されるが、ある一部の教科の教員養成は、実業大学や教育大学で養成される。しかし、一般的には各州の教育大学で各州の小・中学校の教員を養成している。

教員養成の模範は、教育局の公式刊行物によって規定されている。その規定内で、当局はカリキュラムと内容を編集する。その結果としての卒業証書、賞状、その他の資格は当局及び学校に委ねられている。

・ 黒人

黒人教育の早期における歴史は、布教の努力の歴史と言える。1904年頃から1954年まで黒人教育は、教会や4つの州の教育局によって準備、管理されてきた。多くの場合、州の

局内の特設された部で、“現地”教育を行ってきた。そして、独自の教育内容と教科書が、黒人小学校で用いられている。

黒人教育の研究委員会報告（1949～1951）によると、中央政府は1953年の黒人教育決議によって黒人教育を管理することになった。その主な目標は、できるだけ多くの生徒に基礎教育を行い、新しい世代に文盲をなくすことである。以来15年間の主な努力は、初等教育に対してであった。その後黒人教育の目標は中等教育に移行し、1970年代に入ると成人教育の段階にまで進むことになった。

i) Pre-school Education (幼児教育)

各種の共同体や団体は、保育所における3～5才の教育プログラムを紹介することで、Pre-schoolの建物を造ったり、現在の保育所を改善したりすることを奨励している。こうして改善された保育所は、その時点で州立あるいは私立のPre-Primary schoolとして、教育養成課（DET）に登録される。

ii) Primary Education (初等教育)

Primary school（小学校）はSub. AとB、Std. 1と2からなるJunior Primary（小学校前期）と、Std. 3～5までのSenior Primary（小学校後期）に分かれている。1983年の教育白書によると、できるだけ多くの生徒が、基礎教育を受ける際に入学準備が確実にできるような方法と手続きを、調査するグループが任命された。対象は5才児とされた。

小学校は黒人教師であり、Lower Primary School（小学校低学年）では、ほとんど既婚の女性の校長である。また教師の約3分の2が女性である。

DET管轄下の学校では、最初の4年間（Std. 2まで）は、次の言語のいずれかで授業が行われる。コーザ、ズル、ツワナ、北部ソト、南部ソト、スワジ、ツォンガ、ベンダの各語である。これらの言語は、同時に教育課目でもあり、大学まで通して学ぶことができる。また英語とアフリカーンスの両公用語は必修科目である。

教育課程において、3つの言語（英語、アフリカーンス、母国語）に加えて、数字と環境学をStd. 1, 2で、歴史と地理はStd. 3～5で行う。他に、一般科学、健康教育、宗教教育、音楽、技術などの科目がある。そして小学校の最終学年（Std. 5）には、中等教育を受ける資格を与えられる内部試験を受ける。

iii) Secondary Education (中等教育)

Primary Education（初等教育）7年の後、Secondary Education（中等教育）が5年間（Std. 6～10）続く。科目と専攻は広範囲に及ぶが、公用語のひとつ（英語かアフリカーンス）とアフリカの言語、そして自然科学（物理、生物、数学、家庭経済学、農業科学、製図と木工）、人文科学（歴史、地理、聖書、音楽、芸術）、商業（計量、実務、経済、商業数学、タイプ）、以上を合科した一般学、技術と製図、これらの中から4科目以上を履修しなければならない。また、音楽（クラス唱和）、体育、宗教教育、そして職業ガイダンスは試験のない必修科目である。

iv) 教員教育

黒人教育の内容向上において、主な困難のひとつは、小学校や中学校での資格を有した教員の不足である。

1953年に、各州が黒人教育を引き継いで以来、小学校への入学者は爆発的な増加を招いた。そのため、Std. 8の証書及び同等の資格を有しているものを教員として採用することにした。しかし、以前にも増して入学者の増加が続いたので、教育大学の2年間の教員コースと、Pre-Std. 10を段階的に廃止し、3年間のPost-Std. 10の教師学位コースを設置することになった。

・ カラード

カラードの共同体の教育は、教育文化課（D E C）⁴⁷の管理下にあり、各州の主体性に委ねられている。Primary school（小学校）とSecondary school（中学校）は、7才から16才までの10年間で、完全に無料の義務教育である。

カラードの子供にとっての最初の学校は、教会等の布教団体によって設けられた。州からの援助は1841年に開始され、次第に拡充されていった。1920年以来D E Cは州立学校の多くを引き継いだ。人口のまばらな田舎では、今なお州立教会学校が残っている。

i) Primary Education（初等教育）

小学校は、できるだけ生徒の家に近いところに建てられる。この政策の結果、とかく小規模の学校となる。科目は、発育に影響を及ぼす無試験科目と、進級にかかわる科目に分けられる。1965年には遅進児童に対する特別クラスが導入され、同年14クラスで開始されたのが、1988年には590クラスに、児童数では119名から8850名にまでふえた。

ii) Secondary Education（中等教育）

中学校での科目も、小学校と同様、発育に影響を及ぼす無試験科目と、進級にかかわる科目に分けられる。Senior Secondary（中学校後期）に進むと、その専攻によって自然科学、人文科学、商業などの教科の選択をしなければならない。

田舎の中学校は“ホステル”（寄宿舎）を備えている。このため中等教育を受ける生徒にとって、教育施設は完全に応じることができるようになっている。中学生徒数の急激な増加は、1965～1988年の23年間で特に著しく、62263名から297829名と、年平均16.4パーセントの増加となった。

iii) 教育養成

小、中学校の教員は、全国13の教育大学で養成されている。1988年に、これらの大学の在籍数は8783人である。教員養成専攻の教育内容は、それぞれの組織等の要求に応えるべく、適宜異なる教育を行っている。

また、より高度な教育を行うための専攻科が、1983年に設けられた。

5. まとめ —— 2つの公用語

南アフリカにおいて、彼らは幼い頃から複数言語の社会で育っている。白人社会においては、アフリカーンスはアフリカーンスと英語の社会、他の白人は母語、英語とアフリカーンス。黒人社会においては母語、英語とアフリカーンス。カラードは両親の母語、英語とアフリカーンスである。そのため学校教育でも2あるいは3言語を学ぶことになる。

ところが、数学や地理といった教科は全て英語で表記されていることに注目しなければならない。つまり、公用語として英語とアフリカーンスが同等に並んでいるのであるが、実質上の基本言語は英語であると言える。ただし、公的建造物などはアフリカーンスと英語の両表記、黒人言語の固有名詞は全てアルファベット表記である。

我々遠い国から南アフリカを眺める時、白人対黒人、という面ばかりが目に入り、軽々に判談をしてしまっている。しかし、現実が存在する白人同士、黒人同士の確執や争いの大きさには気づいていない。アフリカーンスにとって母国は南アフリカであるが、他の白人達は自らの母国を、イギリスとかオランダとはっきりと称す。UNISAのAntony Sanders氏は、近い将来、それもこの数年の内に、公用語は英語のみになるだろう、と断言する。

政治的にも大きく揺れているが、言語や言語教育の面にも大きな改革があるかもしれない。これら、あらゆる面で最も影響を受け、敏感に反応するのもアフリカーンスの人々であることは、間違いなさそうである。

最後に、この稿をまとめるに当たり、UNISAのAntony Sanders氏をはじめ、多くの方の協力をいただいたことを感謝してここに記します。

注1. 南アフリカ共和国 (THE REPUBLIC OF SOUTH AFRICA) を、以下略して「南アフリカ」で表す。

注2. これらの国々は、国際的に国家として認められていない。

注3. オランダからの移住民は、自らのことをボーア（オランダ語で農民の意=Boer）と呼んだ。

注4. グレート・トレック（牛車による大移動）と呼ばれている。

注5. 地域によって（学校によって）Grade i, ii がSub A, B と示すところもある。

注6. Department of Education and Training

注7. Department of Education and Culture

参考

黒人の代表的部族と言語、分布地域

部 族		言 語	ナショナルステート
ン グ ニ 族	ズ ル 族	ズ ル 語	ク ワ ズ ル
	コ ー ザ 族	コ ー ザ 語	ト ラ ン ス カ イ シ ス カ イ
	ス ワ ジ 族	ス ワ ジ 語	カ ン グ ワ ネ
	ン デ ベ レ 族	南部ンデベレ語	クワンデベレ
		北部ンデベレ語	
ソ ト = ツ ワ ナ 族	ツ ワ ナ 族	ツ ワ ナ 語	ボ プ タ ツ ワ ナ
	北 部 ソ ト 族	北 部 ソ ト 語	レ ボ ワ
	南 部 ソ ト 族	南 部 ソ ト 語	ク ワ ク ワ
ツォンガ (シャンガ-ソ=ツォンガ)族		シャンガ-ソ=ツォンガ語	ガ ザ ン ク ル ー
ベ ン ダ 族		ベ ン ダ 語	ベ ン ダ

日本と南アフリカの年限区分

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	(年令)
日本	小 学						中 学			高 校			
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	1	2	3	
南ア	Grade 1	Grade 2	Std. 1	Std. 2	Std. 3	std. 4	Std. 5	Std. 6	Std. 7	Std. 8	Std. 9	Std. 10	
	Sub A	Sub B											
白人	小			学			中 学						
黒人	小				学			中 学					
カラード			小 学					中 学					
	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	(年令)